

MLC の役割と位置付け

野 地 美 幸*

(平成9年10月13日受理)

要 旨

Chomsky (1995) では言語の局所性という特性を説明するために最小連結条件 (MLC) を提示している。本稿の目的は Chomsky の MLC 分析の妥当性を検証し、その役割と位置付けを見直すことである。MLC の動機付けとなった言語事象を整理し、藤田 (1997) で指摘されている Chomsky の MLC 分析の問題点も考慮に入れながら、MLC が現象を正しく捉えることができよう修正を行っている。

KEY WORDS

minimalist program	ミニマリスト・プログラム	economy principle	経済性の原理
minimal link condition	最小連結条件	locality	局所性

1. MLC の動機付け

自然言語の一般的特性の一つに局所性 (locality) が挙げられる。Chomsky (1995) のミニマリスト・プログラム (MP) ではこの特性 (全てではないにせよその重要な部分) を説明するものとして最小連結条件 (Minimal Link Condition, 以下 MLC) が仮定されている。本稿では MLC で捉えようとしていた言語事実を整理し、Chomsky (1995) で提案されている MLC 分析の妥当性を検討する。また、MLC が経済性の原理 (economy principle) なのか、あるいはまた牽引操作 (Attract F) の定義の一部なのかという位置付けの問題についても考えてみたい。

Chomsky (1995) 第4章では MLC を牽引操作の内在的特性と見なし、牽引操作に次のような制限を加えている。

- (1) K attracts α only if there is no β , β closer to K than α , such that K attracts β .
(Chomsky (1995: 311))

MLC は「牽引の対象となり得る要素が2つあった場合、牽引子により近接した要素 (素性) が牽引されなければならない」という条件で、次のような文の対比を説明することを意図したものである：

- (2) a. It seems that John_i was told t_i that IP
b. *John_i seems that it was told t_i that IP
(3) a. (guess) [which book] Q' [they remember [t' Q [to give t to whom]]]]

* 言語系教育講座

b. *(guess) [[to whom]_i Q' [they remember [[which book]_j Q to give _{t_j} _{t_i}]]]]

(2), (3) はそれぞれ非局所的繰り上げ (super-raising) と wh 島の違反 (wh-island violation) が非文を生むことを示している。(2b) の John が移動する直前の構造では、主節の T の EPP 素性による牽引の対象となりうる要素として it と John が存在する。(2b) では it の方が牽引子により近接しているにも拘わらず John が牽引されているが、このような移動は MLC により阻止される。同様に (3b) では which book の方が牽引子により近接しているにも拘わらず to whom が移動しているので MLC に抵触する。

MLC の精神は Chomsky and Lasnik (1993) で経済性の原理として登場する (4) から引き継がれたものと考えられる：

(4) Minimize chain links (MCL).

(Chomsky and Lasnik (1993: 546))

MCL も非局所的繰り上げや wh 島の違反といった相対的最小性 (relativized minimality) 絡みの例を排除するよう意図されたもので、例えば (3b) では to whom が remember の補部の [Spec, CP] を飛び越えて移動するのが非経済的であると見なして排除する。to whom は循環的に移動すればより短い連結を作ることが可能だからである。MCL から MLC への移行には、移動が Move α (Form Chain) ではなく Attract F として捉え直されたことが大きく関与している。Attract F の考え方下では、移動が形態素性の照合のために起こるという MP の仮説は保持されるものの、移動の駆動力が移動する要素自体ではなくて標的 (に含まれるある種の形態素性) にあると見なされる。この移動の捉え方の変化に伴って MCL を規定し直したのが MLC と言えるであろう。つまり、連鎖を形成する際に連結を短くすることは標的の側から言えばより近くのを牽引するということになる。(2, 3) に見られる制約がどのような形で述べられるかは別として、MLC のような条件が (2, 3) のような事実により裏付けられていることは明らかである。

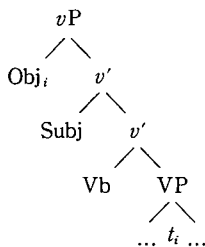
では (1) の牽引操作がどういった要素をより近接していると見なすのであろうか。MLC の近接性という概念についてもう少し詳しく見てみることにしよう。Chomsky (1995) で採用されている定義は (5) である：

(5) If β c-commands α and τ is the target of raising, then β is closer to K than α unless β is in the same minimal domain as (a) τ or (b) α .

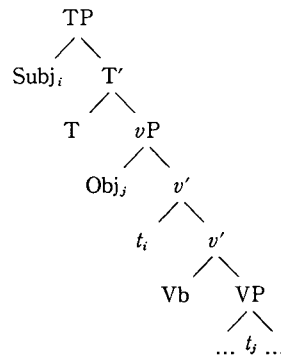
(Chomsky (1995: 356))

(5a, b) はそれぞれ (6a, b) の牽引操作を可能にするように定式化されている。

(6) a.



b.



(6a) はアイスランド語等で見受けられる顕在的目的語転位 (object shift) の例で、目的語が「主語を越えて」移動している。(6b) は顕在的目的語転位の後にさらに主語が「目的語を越えて」[Spec, TP] へ繰り上がっている。このように牽引操作は(5)の近接性の定義を採用することによって、c 統御している (つまり構造上優位にあると考えられる) 潜在的被抽出子の中にも ((6a) の主語や (6b) の目的語のように) 牽引の対象から外れる要素があるということを認めていることになる。

(5) の近接性の定義は(6)を根拠としているという点でその妥当性は顕在的目的語転位の分析の如何に係っている。もっと言う、(6) では主語が目的語よりも先に *vP* 内に併合 (merge) されているが、目的語の牽引が主語の併合に先立って行われ得るのであれば、(5) の近接性の定義は根拠を失うことになる。(5) の定義の検証のために、顕在的目的語転位という現象についてもう少し詳しく見てみることにしよう。目的語転位は、(7) のアイスランド語の例が示すように、本動詞が *T* まで移動している場合に目的語が副詞を越えて左へ移動する現象である：

(7) a. [_{TP} Jón keypti_i [_{vP} ekki *t_i* bókina]]

Jon bought not the book

'Jon did not buy the book'

b. [_{TP} Jón keypti_i [_{vP} bókina_j ekki *t_i* *t_j*]]

Jon bought the book not

Jonas (1992), Bobaljik (1995) 等で考察されていることであるが、他動詞虚辞構文 (transitive expletive construction) で目的語転移が起こっても語順の上で目的語が主語に先行することはない：

(8) a. það lauk einhver verkefninu_i [alveg *t_i*]

there finished someone the assignment completely

'Someone completely finished the assignment'

b. *það lauk verkefninu_i [(alveg) einhver *t_i*]

there finished the assignment (completely) someone

(Bobaljik (1995: 164))

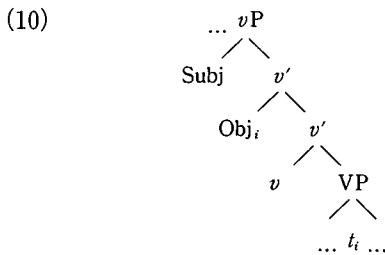
(8) の主語が元の位置を示していると考え、(8b) の非文法性は(6)ばかりではなく、(6) を根拠とした(5)の近接性の定義にとっても反例となる¹⁾。

この問題を配慮してのことか Chomsky (1995: 360) は他動詞虚辞構文を(9)のような多重主語構文として分析する。

(9) Exp [Subj [*T*^{omax} XP]]

(9) では虚辞も主語も *TP* の指定部に位置している。しかしながら、この分析は他動詞虚辞構文の動詞第二位 (verb second) 特性を捉えることができない (Chomsky (1995: 368) を参照)。また、*T* に多重指定部構造を認め(9)を仮定したところで、虚辞のみが *T* の指定部を占め、主語は Spell-Out の時点で元の位置に留まるという可能性を排除することはできない。*T* の解釈不能な ([-Interpretable]) 格素性は *LF* で照合されればいからである。したがって(8b) は依然として排除できない。

Chomsky (1995) では、(10) のように目的語転位が行われた後で主語を挿入するという可能性を認めれば (この詳しい検討に関しては Noji (1997) を参照) 近接性の定義としてより簡潔な(11)が可能となるということが指摘されている：



(11) β is closer to the target K than α if β c-commands α .

(Chomsky (1995: 311))

(11)の近接性の定義はこれまで見てきた(5)の問題点を解消することができる。まず(8b)の文法性に関してであるが、(11)は(6a)の牽引を阻止することになるので、そもそも(8b)は生成されない。

また、(8a)のような他動詞虚辞構文は(12)のように分析することが可能であるので、動詞第二位特性についても何の問題もなく説明可能となる：

(12) [_{TP} Exp V-v-T [_{vp} Subj Obj_i t_v [_{VP} Adv t_v t_i]]]

本節では(1)のMLCとそこで問題となる近接性の定義の動機付けについて考察を行った。MLCが非局所的繰り上げやwh島に関連する現象により動機付けられていること、さらに、近接性の定義に関しては(5)の根拠が薄弱で(5)よりはむしろ(11)を採用すべきであること、を見てきた。

2. 藤田 (1997) の分析

では次に藤田(1997)で提案されているMLC分析の代案を検討してみることにしよう。藤田はChomsky(1995)のMLC分析の抱えている問題として、例えば(13)でMLCは(13b)を(13c)との比較において排除することができるが、(13c)のような文はMLCを遵守し収束する限り派生の際のコストとは無関係に合法化されてしまうことを挙げている。

(13)a. It seems that John_i is [_{t_i} honest]

b. *John_i seems that it is [_{t_i} honest]

c. *It_i seems that t_i is [John honest]

(13c)のような文は主節のTの格素性が未照合のまま残るといった理由で収束しないとChomsky(1995: 296, 348)は述べているが、藤田が指摘するように、Johnの形式素性がLFでTへ移動可能であるのでこの派生は収束する。したがって、Chomskyのシステムで(13c)を排除するには最短派生条件(shortest derivation, 以下SD)のような経済性の原理に頼らざるをえない。(13a)と(13c)は同じN(umeration)を持つ収束する派生であるが、両者を比較してみると、収束するまでに必要なitとJohnに関連する牽引操作が、(13a)の方は1回(Johnの埋め込み文の主語位置への顕在的移動)で済むのに対して、(13c)の方は2回(itの主節の主語位置への顕在的移動とJohnの形式素性の主節のTへの非顕在的移動)必要となる。SDを仮定すると(13c)の派生は(13a)の派生により阻止されることになる。

この説明から明らかなように、藤田で指摘されている問題はMLC自体に内在する問題というよりはむしろSDに関連した問題と言える。SDを認めるということは他の派生との比較を

必要とする(transderivational)条件を文法に組み入れることにつながり、派生の全体性(globality)の問題が生じる点で好ましくない²⁾。

こうした問題を回避し、最適操作をできるだけ局所的に決定できるようにするために、藤田は(14)の最大照合条件(Maximal Checking Condition, 以下 MCC)をMLC(15)に加えることを提案する。

(14) MCC: 牽引子の素性をより多く照合する要素の牽引が経済的である。

(15) MLC: より近接した要素の牽引がより経済的である。

派生の各段階でMCCとMLCの2つの観点から最も経済的な、したがって最適な操作が決定しなければ派生は停止するという想定である。

(14), (15)に基づいて(13c)の派生を再考してみよう。itが主節の主語位置へ牽引される直前の構造は(16)である。

(16) [_{TP} T seems that it is [John honest]]

(16)は(13b)とも共有される構造であるが、この段階で、MLCの観点から言えばitを牽引する方がJohnを牽引するよりもより経済的と見なされるが、MCCの観点から言えばJohnを牽引する方がTの格照合も同時に行われることになるのでより経済的と見なされ、最適操作が決定されない。したがって派生が停止し、(13b,c)は共に生成されない。

以上が藤田(1997)の分析の概要であるが、この分析にもいくつか問題があるように思われる。まず、(13c)でitの主節主語位置への牽引を阻む原因をJohnの牽引の方が牽引子の素性をより多く照合し得ることに求めているが、牽引子の素性をより多く照合し得る要素が他に存在しない場合はMLCに違反しない限り牽引は可能であることを予測する。しかしながら(17)に示すようにこの予測は正しいとは言えない：

(17) a. * [_{IP} [_{IP} John_i to seem [_{IP} t'_i [_{VP} t_i likes Mary]]], is believed t_j]

b. * [_{IP} [_{IP} PRO_i to be illegal [_{IP} t'_i to [_{VP} t_i park there]], is believed t_j]

(Bošković(1995: 131))

(17a)のJohnはt'_iの格位置を離れto seemの主語位置(非格位置)へと移動している。(18b)のPROもまた空格(null Case)が付与されるt'_iの位置から非格位置へ移動している。この2つの移動は(13c)のitの移動と同様にTのEPP素性を照合するだけのために駆動されている。藤田の分析では(13c)を説明することはできても(18)は問題として残る。というのは、JohnやPROの移動を阻止する、つまりJohnやPROよりもより多くの素性照合を行い得る、要素が存在しないからである。

第二の問題点は(18a)のような文の文法性が説明されないことである。

(18) a. There_i seems [_{TP} t_i to be someone in the room]

b. [_{TP} T seems [_{TP} there to be someone in the room]]

(18a)のthereが主文の主語位置へ移動する前の構造が(18b)であるが、この段階で主節の主語位置へ移動しうる要素(DP)はthereとsomeoneである。someoneを牽引するとTの格素性とEPP素性が照合されるのに対してthereを牽引してもEPP素性の照合しか行われないので、thereの牽引はMCCに抵触する。しかしながらsomeoneの牽引はMLCに違反するので、最適操作が決定できず、派生が停止する。ここではthereが牽引されるようになっていなければならないが、MCCがこれを誤って阻止してしまう。したがって結果的に(18a)は生成されない。

ここでは藤田の分析の問題点として(17)と(18a)の例文を挙げたが、(17)はChomskyの分析

にとっても問題となるという意味で2つの分析の優劣を決定する判断材料とはなり得ない。また、他に理由を求めることも可能性として残っており、藤田の分析にとって決定的な問題とも言い切れないかもしれない。しかしながら(18a)は、Chomskyの分析では問題とならないことに加え、非文となることを予測してしまう点でより深刻である。

本節ではChomsky(1995)のMLC分析の代案として提示された藤田(1997)の分析を概観した。藤田の分析はSDのような非局所的条件の破棄には成功したものの、MCCに関して問題が残るということを見てきたことになる。

3. MLCの適用範囲の拡大

Chomsky(1995)の分析と藤田(1997)の分析のそれぞれの問題点を克服し、かつまた2節で見たデータが説明できるかを検討してみよう。まず、(13)から再考してみよう：

- (13) a. It seems that John_i is [_{t_i} honest]
 b. *John_i seems that it is [_{t_i} honest]
 c. *It_i seems that t_i is [John honest]

(13a, b, c)はNを共有する派生であるが、(13a)のように、Johnが埋め込み文の主語位置へ牽引され、itが主節主語位置へ併合されるというのが唯一許されるべき派生である。(13b)が非文となるのは、Chomsky(1995)、藤田(1997)と同様、Johnの牽引がMLC違反を引き起こすからと考えられる。問題は(13c)をSDやMCCに頼ることなく排除することができるかどうかである。

藤田(1997)が指摘しているように、Chomsky(1995)の分析は(13c)の派生が収束することを予測してしまう。主節のTに残される未照合の格素性はJohnの形式素性の繰り上げによって消すことが可能であるからである。ではなぜJohnがitの痕跡(*t_i*)を越えて移動できるかという、痕跡はもはや格素性を含んでいないからである。つまり、(19)を仮定しているからである：

- (19) a. A checked feature is deleted when possible.
 b. Deleted a is erased when possible.

(Chomsky(1995: 280))

ここで削除(deletion)とは、LFで見えない(invisible)が計算(computation)にはアクセス可能であるという意味で、消去(erasure)とは、LFで見えなくなるばかりでなく計算にもアクセス不能となるという意味である。(13c)のitは痕跡の位置でD素性と格素性の照合を行うが、解釈可能なD素性は削除されず(Chomsky(1995: 283))、解釈不能な格素性は(19a)に従って削除される。削除された格素性はさらに(19b)に従って消去される。したがって*t_i*が主節のTに含まれる格素性によるJohnの形式素性の牽引を阻止することはない。

(19b)は照合を済ませた解釈不能な素性が更に計算に参加するのを避けるためのものと考えられるが、これがあつたために(13c)をSDのような条件で排除せざるを得ない状況が作り出されたと言える。そこでここでは(19a)のみを採用することにしよう。(13c)は(19a)と(20)の相互作用の結果として排除される：

- (20) Only the head of a chain CH enters into the operation Attract/Move.

(Chomsky(1995: 304))

(13c) の派生が収束するためには LF で主節の T により John の (格素性を含む) 形式素性が牽引されなければならないが、 t_i には消去された格素性が依然残されており、これが T にとってより近接した要素と見なされるため、John の形式素性は牽引されない。また、 t_i に含まれる消去された格素性は計算にはアクセスするが (20) により牽引の対象にならない。したがって T の格素性が削除されずに残り派生が破綻することになる。

この分析は、(19b) の想定を外すことによって MLC の適用範囲が拡大されることにより可能となっている。(13c) を他の、例えば (13a) の、派生と比較することなく排除することができる点で Chomsky (1995) の分析の深刻な問題は一つ克服したと言える。

では次に藤田 (1997) の問題として指摘した (17), (18a) を再考してみよう。まず (17) であるが、これは、前にも指摘したように、Chomsky (1995) の分析でも説明できないデータである。

- (17) a. $*[_{IP}[_{IP} \text{John}_i \text{ to seem } [_{IP} t_i [_{VP} t_i \text{ likes Mary}]]]_j \text{ is believed } t_j]$
 b. $*[_{IP}[_{IP} \text{PRO}_i \text{ to be illegal } [_{IP} t_i \text{ to } [_{VP} t_i \text{ park there}]]]_j \text{ is believed } t_j]$
 (Bošković(1995: 131))

(17a) の John と (17b) の PRO の非時制節の主語位置への移動は EPP 素性が引き金となっている。この移動によって照合されるのは T の EPP 素性だけであることから、Bošković(1995) は Greed に抵触するとしてこれを排除している。しかしながら Greed のような経済性の原理を仮定することに関しては議論の分れるところである³⁾。そこでここでは、(17) のような文を説明するために強素性と牽引子とを区別することを提案する。つまり、(21) を仮定する：

(21) EPP 素性は強素性であるが T に格素性が含まれている場合にのみ牽引子となる。

(21) は、EPP 素性が Spell-Out の時点で照合されていなければならないという点では強い素性であるが、この素性がさらに牽引子となるためには格素性が存在しなければならないことを意味しており、ある素性が強いということが牽引子となるための必要条件ではあっても十分条件とは限らないという想定に基づいている。これを仮定することにより、(17) の John と PRO の移動は、T がこの場合格素性を欠き牽引子とならないことから、そもそも生じないことになる。したがって T の EPP 素性が強いにも拘わらず Spell-Out の時点までに照合されないの、派生が破綻する。

(21) を仮定することにより、次のような文の対立も問題なく説明される：

- (22) a. $\text{there}_i \text{ seems } t_i \text{ to be someone in the room}$
 b. $*\text{there seems someone}_i \text{ to be } t_i \text{ in the room}$

(22a) は先に藤田 (1997) の MCC による分析にとっての問題として挙げた (18a) と同じ例文であり、there が移動する直前の段階で someone の移動の方が MCC の観点からより経済的と見なされてしまうために説明がつかなかったものである。(22a) と (22b) は N を同じくする派生で、(23) の段階まで同じ派生をたどる：

- (23) $[_{TP} \text{ to be someone in the room}]$

この段階で [Spec, T] の位置へ there を併合したものが (22a) で、someone を牽引したものが (22b) である。Chomsky (1995: 348) は (22) を説明するために併合は牽引に優先して行われると仮定しているが、併合を優先させた結果派生が収束しないというのであれば牽引が選択されるという条件が付されており、結果として併合を優先させるか牽引を優先させるかは派生が収束するか否かに依存することになる。しかしながら、派生が収束しない場合に牽引を優先させ

るのであれば、真に併合が牽引に優先しているとは言い難い。一方(21)を仮定すれば、(23)の段階で可能なのは there の併合だけとなり、より局所的に最適操作を決定することが可能となる。また、(22a)で there が主節主語位置へ牽引可能となるのは主節の T が格素性を含んでいるからである。この分析では MCC を仮定していないので someone の存在が there の移動に際して障害となることはない。

ではなぜ(24)は可能なのであろうか：

(24) I believe someone_i to be t_i in the room

Noji(1997)では、英語の目的語位置に虚辞が存在し得ること、また、動詞・不変化詞構文が可能であること等を根拠に、英語の動詞の格素性が強いという結論を導き出している⁴⁾。これが正しいとすると、(24)は(21)と矛盾するものではない。というのは、(24)の someone は例外的格付与動詞 believe の強い格素性によって牽引されるからである⁵⁾。

本節では、Chomsky(1995)と藤田(1997)の分析に対する代案を提示し、(17c)のようなデータに関しては(19b)の想定を破棄してMLCの適用の拡大を図ることによって説明が可能となることを見てきた。2節で指摘した(Chomsky(1995)と)藤田(1997)の分析の問題も、ここでの分析の下で(21)を仮定することにより解消されることを示した。

4. MLC の位置付け

では最後に、MLCが経済性の原理なのかそれとも牽引の定義の一部なのかという位置付けの問題について考えてみたい。前者の立場を取るのが藤田(1997)であり、後者の立場を取るのがChomsky(1995)である。

Chomskyは経済性の原理について次のように述べている：

(25) a. The linguistic expressions are the optimal realizations of the interface conditions, where “optimality” is determined by the economy conditions of UG.

b. Economy considerations hold only of convergent derivations: D_A is a subset of D_C.
(Chomsky(1995: 171, 221))

ここから、経済性の原理とは派生が収束するかどうかを決定する際に働くものではなくて、収束した派生の中から最適派生を選び出す際に関与するものであると言える。これを基準に(13b, c)の派生を再検討してみよう：

(13) b. *John seems that it is [t_i honest]

c. *It_i seems that t_i is [John honest]

前に見たように、(13b, c)は(16)の段階までは派生を共有している：

(16) [TP T seems that it is [John honest]]

ここでMLCを破ってJohnを[Spec, TP]へ牽引すれば(13b)が生成され、MLCを遵守してitを牽引すれば(13c)が生成される。つまりMLCは実質上(13b)と(13c)の派生を比較して、(13c)を選び出す働きをしている。(25)で述べられているように経済性の原理が収束する派生を対象にするのであれば(13b, c)は共に収束する派生でなければならない。Chomsky(1995: 296)は(13c)のような派生が収束しないこと等を理由にMLCを経済性の原理として位置付けるのではなく、牽引の定義に組み入れる((1)を参照)。

一方藤田(1997)は、Chomskyのシステムで(13c)の派生が収束しないというのは間違いであ

る (LF で主節の T の解釈不能な格素性が John の形式素性の牽引により照合される) ことを指摘し、MLC を経済性の原理として提示する。

ここでの分析では、(13c)は主節の T による John の形式素性の牽引が MLC 違反を招くという理由で排除される。ここで MLC は John の形式素性が牽引される派生と虚辞の痕跡の形式素性が牽引される派生とを比較しているのであるが、前者が収束する派生であるのに対して、後者は痕跡が牽引の対象となることはないので((20))収束しない。したがって(25)の観点から MLC はやはり経済性の原理ではなくて牽引操作の定義の一部として位置付けられるべきであると結論付けることができる。

本稿では文法の中での MLC の役割と位置付けについて再検討してきた。MLC が正しく機能するためには (11) の近接性の定義が必要になること、LF での MLC 違反を適切に排除するためには (19b) の仮定が不要となること、そして MLC は牽引操作の定義の一部として位置付けるべきであること、を見てきたことになる。

註

本稿をまとめるにあたって、池内正幸先生より貴重なコメントを寄せて頂きました。ここに記して感謝の意を表します。

¹⁾ Bobaljik and Jonas(1997)は、次のような事実を示し、主語の元の位置が目的語転位により移動した目的語の位置よりも構造的に低い位置にある可能性を指摘している。

- (i) a. Ífyrri máluðu stúdentarnir húsið [studum allir rautt]
last year painted the students the house sometimes all red
'Last year, all the students sometimes painted the house red.'
b. Ífyrri máluðu stúdentarnir [studum allir húsið rautt]
last year painted the students sometimes all the house red

(Bobaljik and Jonas(1997: 221))

(ia)は(ib)に目的語転位を適用した文で、husiðが主語を修飾している数量詞の左に位置している。数量詞が修飾する名詞句の痕跡の位置を示すのであれば(b)のstúdentarnirはもともとhusiðよりも低い位置にあることになる。しかしながら、Bobaljik (1995)等で論議されているように数量詞の生起する位置と修飾される名詞句(の痕跡)の位置は必ずしも一致しないので、(ia)は主語が目的語の移動に先立って構造に導入されていることを示す強い証拠にはならない。

²⁾ 経済性を計算する上で他の派生との比較を必要とする条件を局所的な経済性の条件として定式化し直そうとする最近の試みとしてはStemefeld(1997)が挙げられる。

³⁾ 次のような例から明らかのように、存在文でthereの移動を可能とするためにはthereが格を持つと仮定しなければならなくなる。

- (i) There_i seems [_i to be a man in the garden].

⁴⁾ Zidani-Eroglu (1997) はトルコ語のデータに基づいて同様の議論を展開している。

⁵⁾ (24) のような例で埋め込み文の T の EPP 素性がどのように照合されるかという問題は今後の研究課題として残したい。(24) が容認可能であるということは T は EPP 素性が顕在統語

論で照合されていることを示していることになるが、照合のし方については、素性の強弱に拘わらず牽引の途中で照合し得る素性があった場合どのような形で照合が行われるかというもっと一般的な問題と合わせて検討する必要があるであろう。例えばフランス語では (i) のように目的語の *wh* 句が疑問化で前置されると動詞の過去分子と目的語の間で一致が起こる：

- (i) *Combien de tables Paul a repeintes?*
 how many tables Paul has repainted (pl)
 ‘How many tables has Paul repainted?’

この事実が顕在統語論で目的語が動詞と照合関係にはいることを示しているのであれば、その照合の方法は (24) の埋め込み文の *T* の EPP 素性の照合のし方と同じになるはずである。

参考文献

- Bobaljik, J. (1995) *Morphosyntax: The Syntax of Verbal Inflection*, doctoral dissertation, MIT.
- Bobaljik, J. and D. Jonas (1996) “Subject Positions and the Roles of TP,” *Linguistic Inquiry* 27: 195-236.
- Bošković, Ž. (1995) *Principles of Economy in Nonfinite Complementation*, doctoral dissertation, University of Connecticut.
- Chomsky, N. (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge.
- Chomsky, N. and H. Lasnik (1993) “The Theory of Principles and Parameters,” in J. Jacobs, A. von Stechow, W. Sternefeld, and T. Vennemann (eds.), *Syntax: An International Handbook of Contemporary Research*, de Gruyter, Berlin.
- 藤田耕司 (1997) 「最適派生理論の最適化に向けて」『英語青年』第143巻第2号：74-76.
- Jonas, D. (1992) “Checking Theory and Nominative Case in Icelandic,” *Harvard Working Papers in Linguistics* 1: 175-196.
- Noji, M. (1997) “Objective Case Checking and Parametric Variation,” *English Linguistics* 14: 129-158.
- Sternefeld, W. (1997) “Comparing Reference Sets,” in C. Wilder, H-M Gärtner and M. Bierwisch (eds.), *The Role of Economy Principles in Linguistic Theory*, Akademie Verlag, Berlin.
- Sportiche, D. (1988) “A Theory of Floating Quantifiers and Its Corollaries for Constituent Structure,” *LI* 19: 425-449.
- Zidani-Eroglu, L. (1997) “Exceptionally Case-Marked NPs as Matrix Objects,” *Linguistic Inquiry* 28: 219-230.

The Role and Status of the MLC

Miyuki NOJI

Abstract

Chomsky (1995) proposes the Minimal Link Condition (MLC) to explain the linguistic property of locality. The purpose of this paper is to examine the validity of Chomsky's MLC analysis and to reconsider the role and status of the MLC in the grammar. First the linguistic phenomena motivating the MLC are presented. Second, taking the problems of Chomsky's analysis into consideration, I make a modification so as to correctly capture the phenomena.